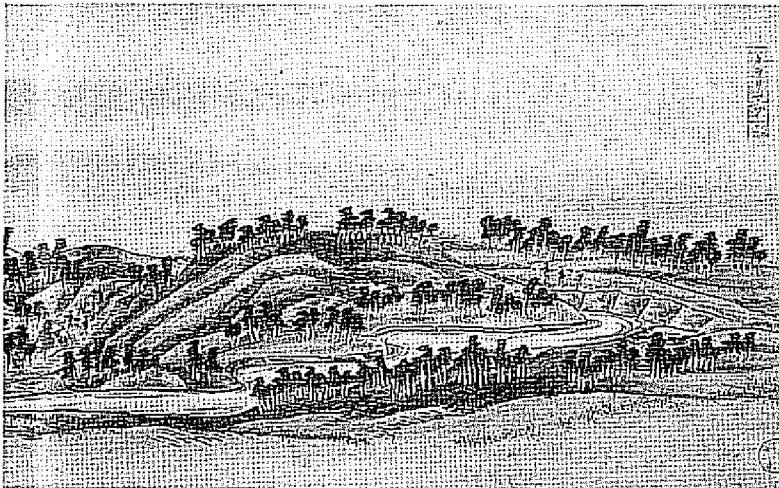


中標津町郷土館だより

第13号

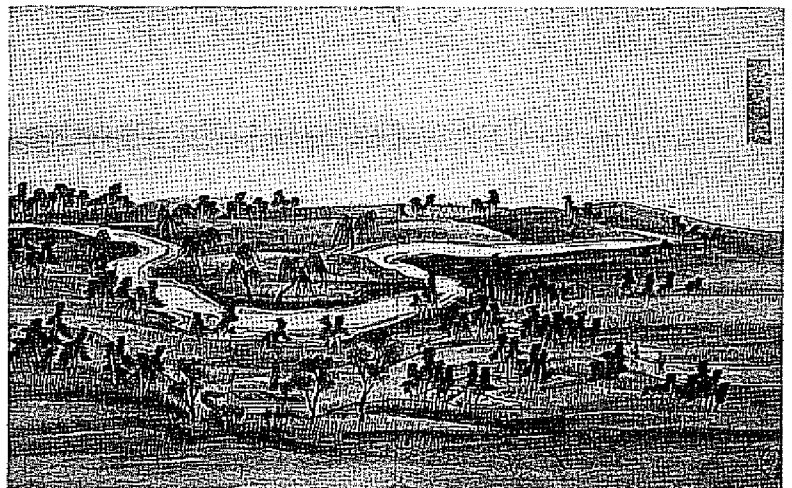
発行 平成11年8月31日
発行所 中標津町教育委員会
標津郡中標津町丸山2丁目22番地
電話 01537-3-3111



【図1 タラリマフ】

川のそばにある小山の右に3人、左に2人が歩いています。

右下に2人。
左下には細長い「休憩所」が見えます。



【図2 トエビラ】

この2点の絵は、江戸時代の安政4年（1857）に北海道内を歩いた目賀田帯刀という人が描き、明治4年（1871）に外務省に提出したものの一部です。

図1のタラリマフは、もともと中標津市街を流れている「倭真布（タワラマップ）川」の語源となった地名ですので、この風景は中標津市街地中心部付近が描かれたことがわかります。

図2のトエビラは、中標津町と標津町の町界からやや標津寄りと推定される場所が描かれています。

こうした資料は昔の中標津の状況を知る貴重な手がかりのひとつと言えますが、今回、この絵と同じ時代の資料が発見されましたので、次のページから紹介します。

藤野家文書にみる山道の小休処

本田克代 (1) ・山宮克彦 (2)

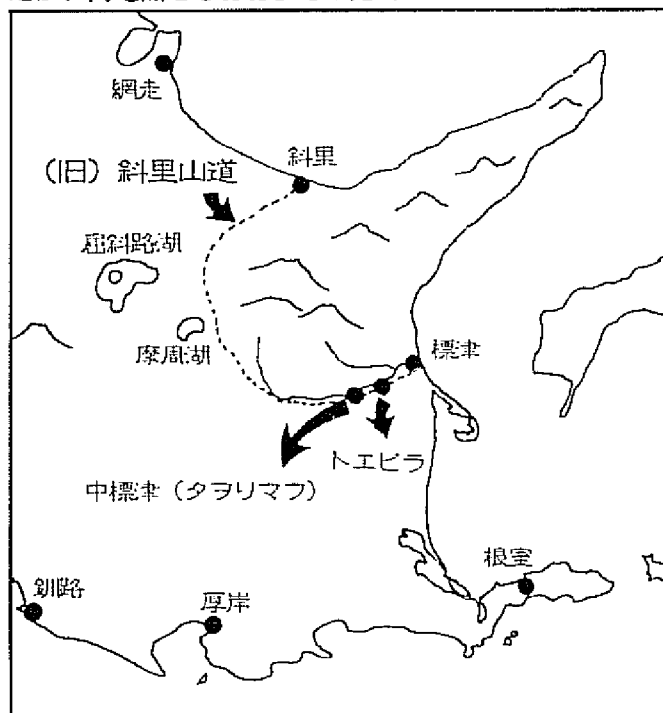
今回紹介する図面は、根室場所を請け負った藤野家の文書の中の一資料である『嘉永七年寅年 公辺御役人様御通行之節 場処御居間割兼絵図 六枚』というもので、函館市の旧藤野家の蔵から発見されたものです（現在は函館市の金子元保氏の所蔵です）。

藤野家文書は全部で279点あり、北海道立文書館にマイクロフィルム全20巻として収められています。文書の多くは、根室詰め役人あてと藤野本店にあてた文書類の控えて、当時の根室地方の動きを知る貴重な資料となっています。

藤野家は柏屋の屋号を持ち、しるしは矛（またじゅう）でよく知られています。天保3年（1832）～同11年（1840）と、嘉永2年（1849）～明治2年（1869）まで、根室場所を請け負っていました（ただし西別川から北方面は文久2年（1862）に会津藩から罷免されている）。

江戸時代の終わり頃、シベツ（標津）方面からシャリ（斜里）へ、またその逆のコースをたどるのに、シベツ川沿いからケネカ川の合流点へ出て、ケネカ川とシベツ川にはさまれた平野を通過して、現在の道々摩周湖中標津線に近いケネカ川沿いの道を行き、清里峠（現在の峠から北寄り）を越える「（旧）斜里山道」という道がありました（図3）。

当時のシベツには、現在の標津神社付近に人家があり、海岸沿いに南下した「ホニオイ」と言われた場所から内陸へ向かいました（現在の国道272号道よりは少し標津川寄りになります）。現在の中標津市街は「タマリマフ」と呼ばれ、小休処があり、また、タマリマフとホニオイの間には「トエヒラ」と呼ばれる小休処もありましたが、両地点ともおおよその見当しかついていません。



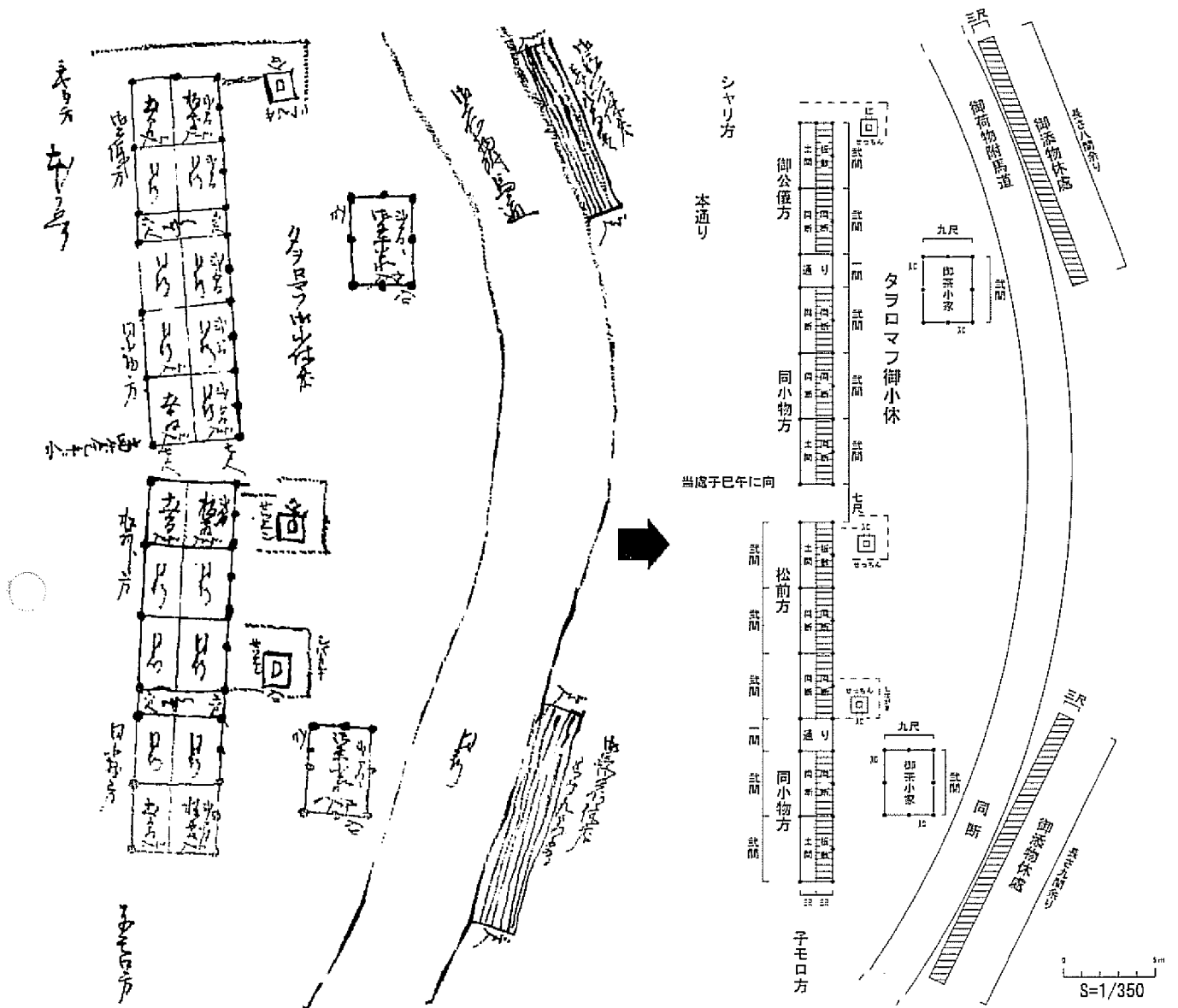
【図3 (旧)斜里山道の位置】

昔は、馬に乗るのはほんの一部の人のみで、すべて歩きでしたので、途中で休憩所や宿泊所が必要でした。シベツを出てシャリへ向かう途中、第一日目に宿泊するのは、中標津市街より標津川沿いの少し上流である「チライワッタラ」（標津川とポン俣落川の合流地点の対岸付近）でした。

安政元年（1854）に函館奉行がおかれてからは、役人の見廻り（巡回）が特に多くなりますが、これは通行とか廻浦（かいほ）と言われ、役職によってお供の人数も異なりますが、その接待や案内は場所請負人の仕事でした。数名の通行人の場合は、普段設けてあった小休処でこと足りましたが、数十名の一行の接待は大変なことでした。ここに紹介する図は、その大勢の時の様子の一端的な記録です。

嘉永7年（＝安政元年（1854））5月、堀織部正、水野正左衛門一行は一日ずれて福山を出発し、宗谷へ向かいました。更に北蝦夷地（樺太）の久春古丹まで行き、南下して道東へまわりました。つまりシャリ側から山越えをしてシベツへ向かったのです。

(1) 根室市在住 (2) 中標津町教育委員会



【図4 タラロマフ御小休處】

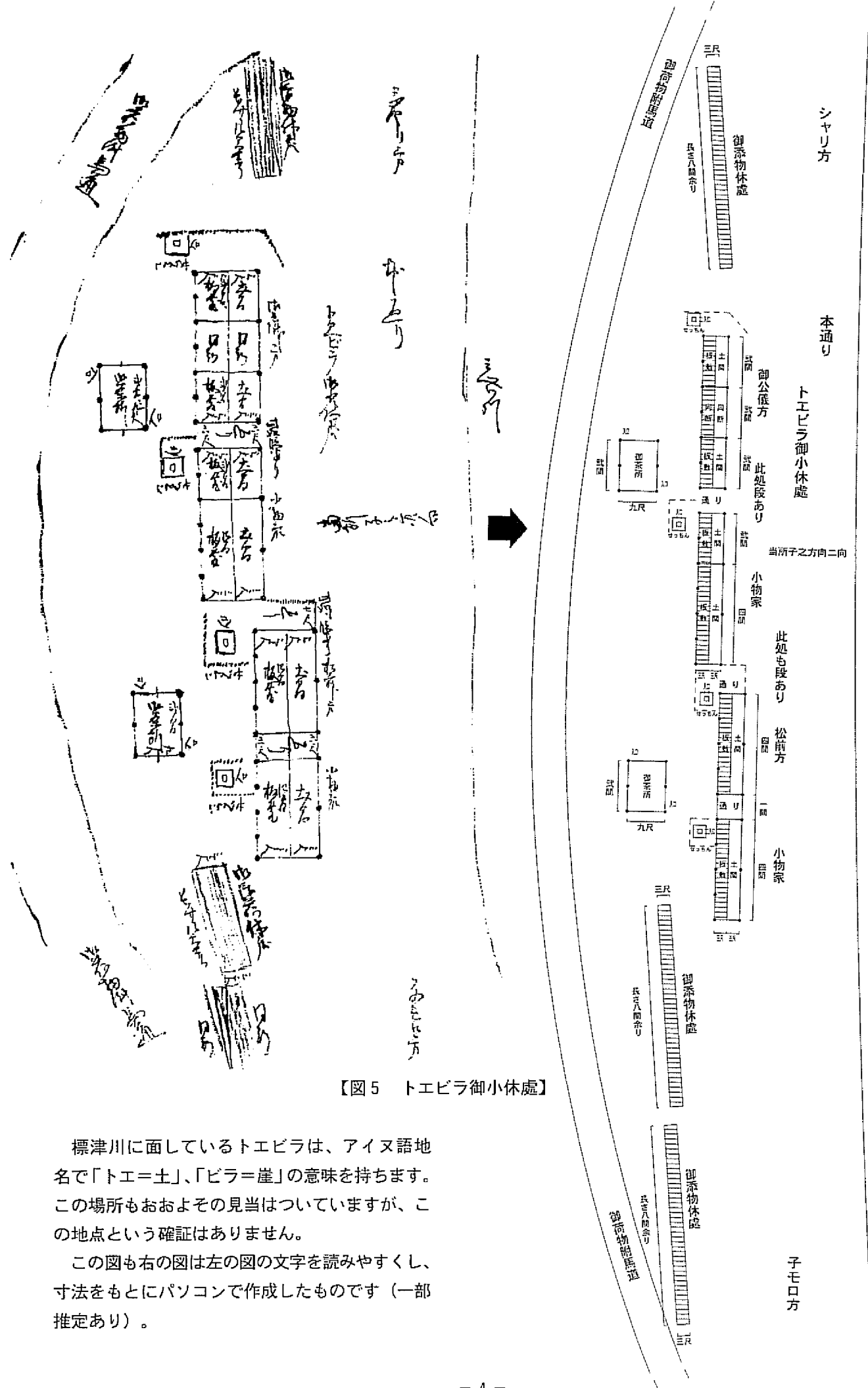
タラロマフはアイヌ語地名で「タイ・オロ・オマ・プ=林・中・にある・もの」の意味にとれます。

タラロマフは中標津市街を流れる「俵真布川=タワラマップ川」にその地名が残っています。丘の間を流れて来た小川が標津川に注ぐのですが、小休処は標津川の氾濫の及ばない河岸段丘上で、俵真布川に近い所に設けられたと思われます。

図面の間には、「堀織部様」「水野正左衛門様」「橋本悌蔵様」「上御供様方」「下御供様方」とそれぞれ大きい字で書かれたものが5枚入っていて、「堀織部様御一行」の人数に合わせて臨時に設けられた「小休処の図」と見ることができます。

人数については同じ藤野家文書の中の「嘉永七寅ノ年閏七月 堀織部様差上候書面写 支配人善吉控え」というものの中に、「堀織部様上下四拾人、平山謙次郎様上下九人、松岡徳次郎様上下三人、メ五拾弐人。御附添拾三人。河津三郎太郎様上下九人、吉岡元平上下三人、メ拾弐人。御附添七人」とあり、合計84名はいたようです。また、村垣淡路守範正與三郎は前後して通行したとみても、同じ藤野家文書の中の「嘉永七年寅閏七月 村垣與三郎様上下四十七人、山金左衛門様上下七人、吉見健之丞様上下三人、御附添弐拾人」とありますので、合計77名の大人数が通行していることがわかります。

右の図は左の図の文字を読みやすくし、寸法をもとにパソコンで作成したものです（一部推定あり）。

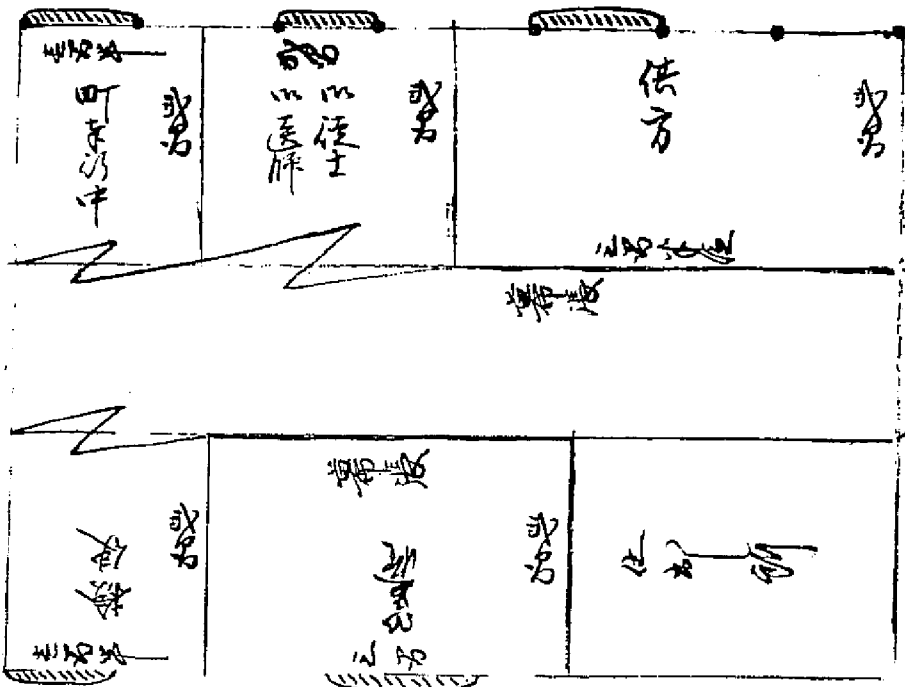


【図5 トエビラ御小休處】

標津川に面しているトエビラは、アイヌ語地名で「トエ=土」、「ビラ=崖」の意味を持ちます。この場所もおおよその見当はついていますが、この地点という確証はありません。

この図も右の図は左の図の文字を読みやすくし、寸法をもとにパソコンで作成したものです（一部推定あり）。

上之分 居風呂
 下之分 前同断
 作身(註1) 無之ヶ所は如图
 幕張二而取斗来候
 大小便所一ヶ所

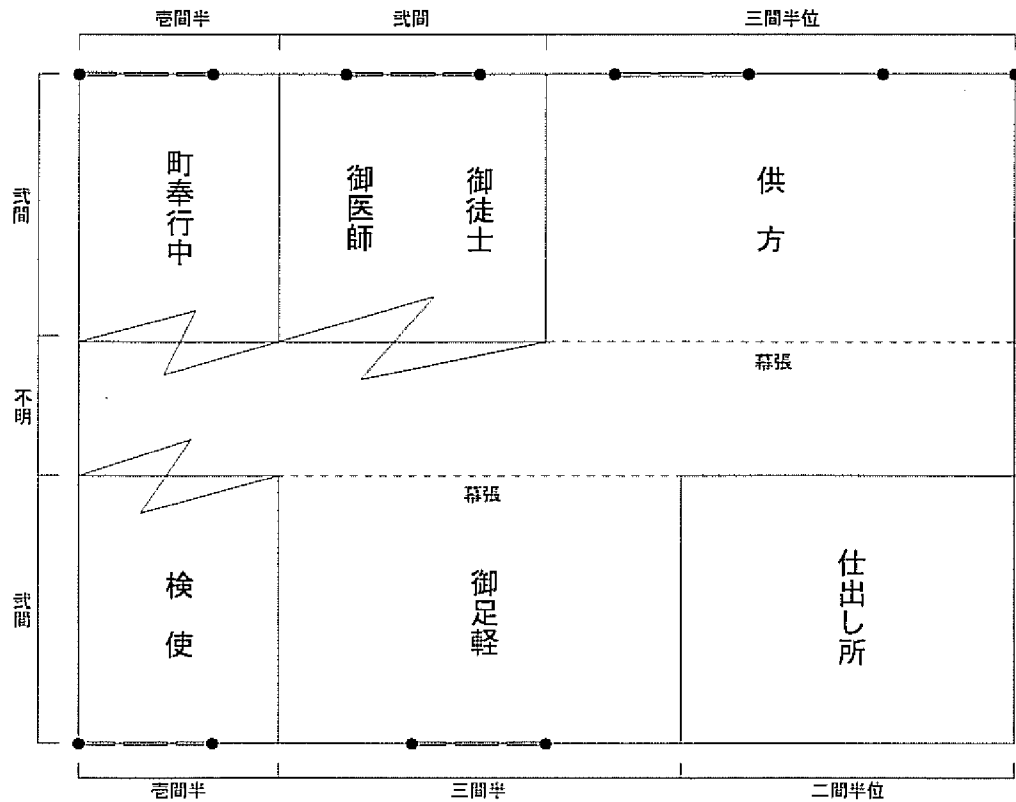


江戸御添人数旅宿間取図



上之分 居風呂
 下之分 前同断
 作身(註1) 無之ヶ所は如图
 幕張二而取斗来候
 大小便所一ヶ所

御附添御人数 宿間取図



入口

S=1/100

【図6 御附添人数旅宿間取図1】

侍附添御人数上下三十四人

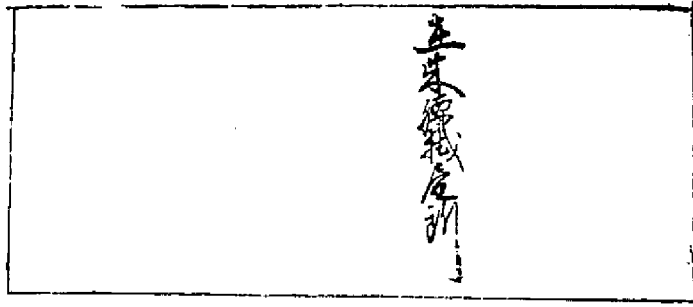
御附添御人数

御附添御人数腰掛飯家掛方

御役人様御腰掛より脇手又は後手が御目障り不相成様
人数二応ジ五六間位二而取斗来り候。尤兩向二而

武拾人位腰掛候様可然と奉存候

便所飯圍二而壹式ケ所



在来腰掛屋所

御役人様御腰掛并御供方腰掛不足
之分ハ別段飯家柱二而取斗来候

大小便所之儀ハ御見計之上板圍

便所并式三ケ所



御附添御人数上下三十四人二而

如圖間割御座候

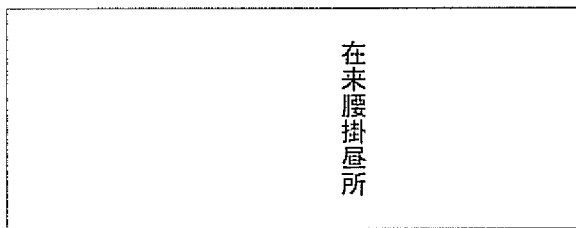
御附添御人数腰掛飯家掛方

御役人様御腰掛より脇手又は後手が御目障り不相成様

人数二応ジ五六間位二而取斗来り候。尤兩向二而

武拾人位腰掛候様可然と奉存候

便所飯圍二而壹式ケ所



在来腰掛屋所

御役人様御腰掛并御供方腰掛不足
之分ハ別段飯家柱二而取斗来候

大小便所之儀ハ御見計之上板圍
便所并式三ケ所

【図7 御附添人数旅宿間取図2】

今回の資料紹介について、現在の所有者である金子元保氏には快く了解いただき、また、文書の解読には秋葉實氏にご指導いただきました。ともに深く御礼を申し上げます。

紹介した文書は、北海道立文書館のマイクロフィルムで見ることができます。使用した図は、藤野家文書マイクロフィルム リール12 No.150 請求番号 F-2/2508で、これには次のものが入っています。

『嘉永七年寅年 公辺御役人様 御通行之節 場廻御居間割兼絵図 六枚』

- 御證文台図、御朱印台図
- 御附添御人数旅宿間取図
- 上御供様方
- 下御供様方
- トエビラ御小休処 (平面図)
- 会所 (平面図、シベツ会所に似ているが不明)
- 堀織部正様 (註2) (名前が大きな字で書かれている)
- 橋本悌蔵様 (註3) (名前が大きな字で書かれている)
- 水野正左衛門様 (註4) (名前が大きな字で書かれている)
- タヲロマフ御小休処 (平面図)
- 会所 (平面図 どの会所かは不明)
- ヲタスツ略図 (会所と会所付近図)

註1 作身

作り身は刺身の意味ですが、「さくしん」という熟語は見当たりませんでした。身は本体を指すので、作った便所の建物がない所は、幕を張って間に合わせています。(秋葉 實氏のご教示による)

註2 堀 利熙 (織部正)

箱館奉行。安政元年正月、勘定吟味役村垣範正と共に蝦夷地事情調査の命を受け、3月に江戸を出て、蝦夷地、樺太をまわる。6月箱館奉行が置かれ、奉行竹内保徳が任じられ、次いで7月に奉行増員となり、利熙が織部正となる。

8月東蝦夷地を経て箱館に帰り、村垣範正與三郎と共に巡視の始末、開拓警備の方法を幕府に報告。(安政5年7月、外口奉行を兼ねる) 万延元年11月、老中安藤信正と(プロシア)条約のことで激論して切腹した。

註3 水野正左衛門

幕臣。勘定評定所留役。堀織部正の随行を命ぜられ、先発として出発。東蝦夷地巡回中箱館奉行支配組頭となったが病のため8月函館に戻り没した。

註4 橋本悌蔵

箱館奉行。普請役格代官手付。安政元年、堀織部正と村垣與三郎に従って蝦夷地巡視。同年閏7月、箱館奉行支配調役下役となる。慶応2年9月には箱館奉行組頭となり、同年小出大和守がロシアへ派遣された時は随行。明治元年3月には箱館奉行並になったが、まもなく廃官となった。

中標津町で見られる蝶 (9)

●オオヒカゲ (ジャノメチョウ科)

日本のジャノメチョウ科では最も大きな蝶ですので、もっと目立っても良いと思うのですが、生活の場が川沿いや沢沿いなどの立木を交えた、小湿地や湿気を強く感じるような林の縁などですので、陽の当たる場所で見るとはまずありません。

成虫は年1回発生し、林の中や縁をフワリフワリと緩やかに飛び回ります。たまに少し広い場所に出て、すぐに茂みに戻ってしまいます。これは広い場所がきれいなのではなく、明るい場所がきれいなようです。そのため晴れている日には朝と夕方に、また、曇りの日には1日中活発に飛びまわります。

成虫の食事の多くは樹液で、花の蜜を吸うことはほとんどありません。

幼虫はカヤツリグサ科のスゲ属(カサスゲ、エゾアブラガヤ、ヒゴクサなど)を食べ、幼齢期には集団で行動します。また、幼虫の状態ですぐ越冬をします。



【『北海道の蝶』、北海道新聞社より】

～参考文献～

『北海道の蝶』、北海道新聞社、1985年

『北見の蝶』、木村辰正、1994年

『野外ハンドブック・2 蝶』、

山と溪谷社、1977年

平成8～10年度の寄贈資料

年月日	寄贈者名	資料名	点数
96.04.10	佐野鐵男	一般用米穀類購入通帳	1
96.04.18	工藤利勝	蹄鉄(サラブレッド用)	1
96.05.02	安藤吉一	マサカリ	1
96.05.06	工藤利勝	カメラ	1
96.05.14	佐々木タケ子	中標津農協預金通帳	1
96.06.28	村山キヨ子	写真	3
96.07.17	工藤利勝	放熱ルンペンストーブ	1
96.10.01	宗方源治	スコップ	1
97.02.07	白崎千代	米びつ、拵他	6
97.03.25	鈴木元明	軍服、国民服他	16
97.06.14	高橋和夫	背中あて(荷負いミノ)	1
97.07.01	岳田道雄	スキー、角巻他	5
97.08.20	工藤利勝	袋ヤス	1
97.09.08	本多正美	八角時計	1
97.10.07	中曽根茂四郎	鍔釜、ストーブ他	20
	佐藤元明	親子鉄瓶、こたつ	3
97.12.02	竹内正夫	ミシン、裁板	2
98.03.20	中標津町役場	剥製、掃除機他	35
98.06.30	多田輝夫	剥製	10
98.10.09	今野誠	『早引大節用』	1
98.12.08	田子内ミサヲ	壁掛け	1
99.02.26	小笠原春雄	なかしべつ・ゆう・もあ王国々旗	2
合計=			114

3年間で、22件114点の寄贈と、6件8点の採集資料がありました。寄贈者の皆様のおかげをもちまして、現在郷土館には約4,800点の資料が集まりました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いたします。

とはいうものの... 収蔵場所がほぼ満タンの状態になっているので、あまり大きな資料や同様な資料がたくさんある場合はお断りすることもありますので、ご了承下さい。

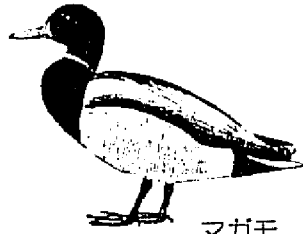
中標津町の野鳥⑪

～ 丸山公園の鳥 ～

※ 平成10年4～11年2月まで、全23回の調査において目視または鳴き声で確認されたもの

〔ガンカモ科〕

- ・オオハクチョウ
- ・オシドリ
- ・マガモ
- ・カルガモ
- ・コガモ
- ・ヒドリガモ



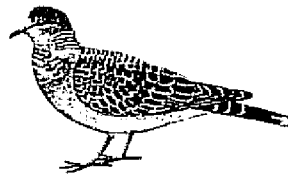
マガモ

〔シギ科〕

- ・イソシギ
- ・オオジシギ

〔ハト科〕

- ・キジバト
- ・アオバト
- ・ドバト



キジバト

〔ホトトギス科〕

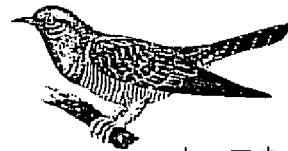
- ・カッコウ

〔アマツバメ科〕

- ・ハリオアマツバメ
- ・アマツバメ

〔キツツキ科〕

- ・アカゲラ



カッコウ

〔ツバメ科〕

- ・ショウドウツバメ

〔セキレイ科〕

- ・ハクセキレイ

〔ヒヨドリ科〕

- ・ヒヨドリ

〔モズ科〕

- ・モズ

〔ヒタキ科ツグミ亜科〕

- ・アカハラ

〔ヒタキ科ウグイス亜科〕

- ・センダイムシクイ
- ・エゾムシクイ
- ・ウグイス
- ・エゾセンニュウ



モズ

〔エナガ科〕

- ・エナガ

〔シジュウカラ科〕

- ・ハシブトガラ
- ・ヒガラ
- ・シジュウカラ



シジュウカラ

〔ゴジュウカラ科〕

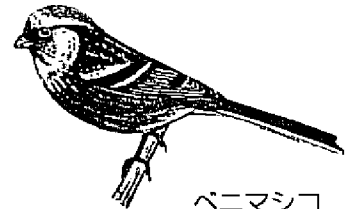
- ・ゴジュウカラ

〔ホオジロ科〕

- ・アオジ

〔アトリ科〕

- ・カワラヒワ
- ・ベニマシコ



ベニマシコ

〔ハタオリドリ科〕

- ・ニューナイスズメ
- ・スズメ

〔ムクドリ科〕

- ・ムクドリ
- ・コムクドリ



ムクドリ

〔カラス科〕

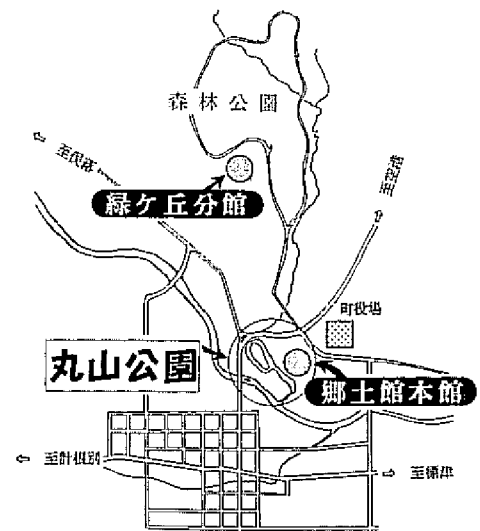
- ・ハシボソガラス
- ・ハシブトガラス

(『フィールドガイド日本の野鳥』、高野伸二著、(財)日本野鳥の会)

以上、20科42種約587個体が確認されました。

この公園は中標津の中心部付近にあるため住宅地に近いのですが、小山、池、川とバラエティに富んだ環境に恵まれているため、多くの種が確認されたと思われます。

場所的にも手頃なバードウォッチングのポイントですので、晴れた日には双眼鏡を持って出かけてみてはいかがでしょうか。



摩周岳と藻琴山

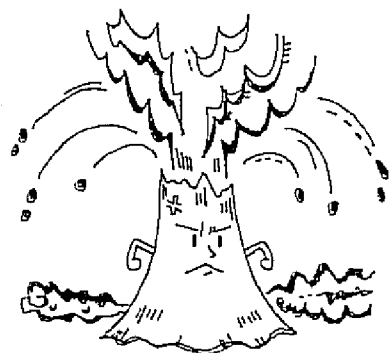
摩周岳（カムイヌプリ）は昔、オメウケヌプリ（抜けていった山）とかイケシェヌプリ（腹をたてる山）と呼ばれていました。それはこの山が腹をたて、ここから抜けて国後島へ行ったと伝えられるからです。

昔、屈斜路湖の奥にトーエトクウシペ（藻琴山）というワガママな山があって、何かというと煙を吐いたり、火を降らして乱暴ばかり働くので、あたりの山の神や人間たちもとても困っていました。

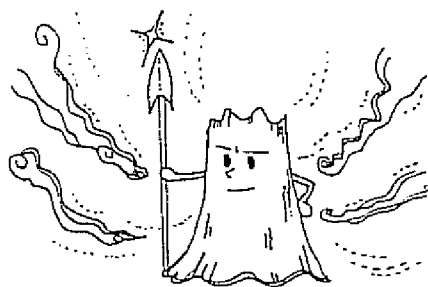
そこで、ピンネシリ（雄阿寒岳）がこの無法者をこらしめてやるため、ヤリ投げをして勝負を決めることになりました。

ピンネシリの投げたヤリは狙い狂わず、トーエトクウシペの胴腹へ見事に突き刺さり、山は二つに裂け血が奔流となって流れ、屈斜路湖畔の岩を真っ赤に染めました。

トーエトクウシペは血を吹き出しながらもヤリをとってピンネシリに投げ返しましたが、狙いがはずれて、ピンネシリの肩のところが少し傷ついただけで、遙か遠くのカムイヌプリに刺さってしまいました。ヤリを刺されたカムイヌプリはとても腹をたて、ここから抜け出すと、国後島まで飛んで行ってチャチャヌプリ（爺々岳）になってしまったのです。



この騒ぎがあってからはトーエトクウシペもおとなしくなり、火も煙も噴かなくなりましたが、ピンネシリのヤリで傷つけられたところはヌプリエベレップ（山の割れたところ）という大沢になり、ドンドン川という奔流が、当時の噴き出した血のように流れ、血に染まった岩は今でも湖畔に残っているとのこと。



一方肩にかすり傷を受けたピンネシリに傷跡は、今も岩が露出して昔の跡をとどめていますが、この出来事からピンネシリをオプタテンケ（ヤリのそれた山）というようになったそうです。

そして、摩周湖畔にあるカムイヌプリの裾の赤岩は、その時に流した血であり、対岸の白い岩は涙であるそうです。

（弟子屈町屈斜路 弟子カムイマ老伝）

千島のチャチャ山

千島の国後島のチャチャ山（爺々岳）は元々釧路からいった山だから、あの沖を釧路の人が通ると海が荒れたり、急に雨が降りだしたりする。それはこの山が涙を流して泣くからだという。

それでこの沖を通る時には必ず酒かタバコをあげて通ったものだ。（釧路鶴居村 八重九郎氏伝）
【『アイヌ伝説集』更科源蔵編著、北書房版より要約】

～ 編集後記 ～

平成10年度から、この「だより」は年1回の発行となりましたが、昨年度は特別号として「なかしべつネイチャーマップ」を発行したため、第12号から約2年ぶりの発行になりました。

今回の資料紹介については、所有者である金子元保氏には快く承諾をいただき、文書の解説には秋葉實氏にご指導いただきました。また、お忙しい中原稿をお寄せいただいた本田克代氏、イラストを描いていただいた佐瀬乃布子氏には厚く御礼申し上げます。